

# チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州事務局  
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号  
Tel・Fax 093(681)1780

口座番号 01770-1-65328  
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1996年5月29日

No.

33



絵 アンドレイ・ヴォルコフ 9歳

(ベラルーシの子どもたちの絵が届きました。本文参照。)

# チェルノブイリ通信NO. 33号を お届けします

4月26日に、チェルノブイリ原発事故から10年目を迎えました。テレビ、新聞、ラジオ等は特集を組んでいまだに続く事故被害のことを伝えていました。新たな事実、新たな病気が明らかになっていく度に、チェルノブイリへの支援運動も新たな展開を必要とされているようです。皆さん！ご声援をお願いします。アイデアもお待ちしています。

今回の通信には、10周年を迎えた現地を訪ねた事務局スタッフの中村さんの手記を載せています。最新のチェルノブイリ情報です。

## 【今回の内容】

- 子どもたちの絵を貸し出します
- 第6次調査団報告
- ベラルーシの生への願い
- チェルノブイリ10周年の各地の取組
- スタディツアーの状況
  - ・メンバー発表
  - ・学習会のお知らせ
- 書籍の紹介
- 新しい東京窓口の紹介
- 事務局より

……となっています。

## ベラルーシの子どもたちの 絵を貸し出します

ベラルーシの子どもたちの絵が届きました。この絵は現地の絵画教室の子どもたちの作品で、支援運動・九州にプレゼントしてくださったものです（中村さんの調査団報告参照）。30枚程あります。子どもたちの目がとらえたチェルノブイリ事故の絵をはじめ、ベラルーシの生活がわかる楽しい絵、そして空想的な絵などバラエティーに富んでいます。チェルノブイリの支援活動に、国際交流にお役立てください。すでに数カ所で展示をしましたが、非常に好評でした。小学校からも貸し出しの申し込みがきています。貸し出し料は無料ですが、送料の負担をお願いします。

40㍻×55㍻の額縁に入っています。

また、「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」に使われた絵のカラーコピー11枚も貸し出しています。こちらは30㍻×40㍻の額縁入りです。写真パネルも従来通り貸し出しを行っています。



# 第六次 チェルノブイリ訪問団報告

中村 隆市

## \*メンバー

- 辻 幹雄 (ギターリスト・11弦ギターの第一人者)  
大友 慶次 (チェルノブイリ・グローバル・ネットワーク代表)  
野中 彰久 (西日本新聞・文化部記者)  
中村 隆市 (支援運動事務局、チェルノブイリ友の会 代表)

今回の訪問は、チェルノブイリ友の会及びチェルノブイリ・グローバル・ネットワークが主催する<チェルノブイリ・レクイエムコンサート>とチェルノブイリ支援運動・九州<第六次調査>との合同訪問でした。

レクイエムコンサートをベラルーシでやることになったキッカケは、昨年八月に来日した作文集(わたしたちの涙で雪だるまが溶けた)作者のお別れ夕食会でした。ゲストとして参加した辻幹雄さんが11弦ギターを演奏。その繊細で優しく美しい音色に子どもたちは感動し、同席していたヤコベンコ同盟議長が、辻さんのベラルーシでの演奏会を熱望し実現しました。

第六次訪問の主な目的は、八月のスタディーツアー打ち合わせ、サナトリウムとナローブリャ病院にビタミン剤を届けること、ブラジルで出版された

ポルトガル語版作文集を届け、ベラルーシから英語版作文集と子どもたちの絵を持ち帰ること、そして今年11月ころ日本に招待する予定のピクトル・ブイソフ父子との打ち合わせと写真展用写真を持ち帰ることでした。

## \*第六次訪問団行程メモ

(1996.4.19~28)

### 4月19日

- ・成田発12:30 モスクワ着22:30 (モスクワ時間17:30)

### 4月20日

- ・セルギエフ ポサード (宗教都市・ロシア正教寺院群) 見学
- ・モスクワ発20:40の夜行列車でミンスクに向かう。

### 4月21日

- ・ミンスク着8:40 (13時間かかった、モスクワ時間9:40)
- ・サナトリウム九州にビタミン剤を贈呈。青少年宮殿絵画教室を訪問。

### 4月22日

- ・クリチェフ (ピクトル・ブイソフの故郷) 博物館にてコンサート
- ・ピクトル宅にて歓迎夕食会。来日の打ち合わせ。

### 4月23日

- ・強制移住のコマロピッチ村訪問

- ・チェチェルスク・メルクールピッチ  
村文化会館にてコンサート

4月24日

- ・ナローブリヤ文化会館にてコンサート
- ・ナローブリヤ病院にビタミン剤を贈呈

4月25日

- ・グルーシコピッチ（リュウダの村）  
地区学校にてコンサート
- ・リュウダ宅にて村長、校長を含めて  
スタディーツアーの打ち合わせ。

4月26日

- ・ミンスク・マリノフカ第205学校の  
チェルノブイリ集会に参加
- ・ベラルーシ音楽アカデミーコンサー  
トホールにてコンサート
- ・ベラルーシ国営テレビのチェルノブ  
イリ10周年特別番組に出演

4月27日

- ・音楽アカデミーの教授、学生との交  
流会
- ・ヤコベンコさんと話し合い

4月28日

- ・ミンスク駅から列車で、ドイツを経  
由してデンマークに移動
- \*一行は、この後、デンマークでチェルノブイリ・チャリティーコンサートを開いてフィンランド経由で帰国。収益金は支援運動にカンパされた。
- デンマークでのコンサートを設定して下さったのが、風力発電機を日本に紹介する仕事をしているステファン鈴木さん。（世界で最も環境を

大切にしている政策をとっているとも言われるデンマークには原発が無い。たとえ事故を起こさなくても「放射性廃棄物」という毒物を作り出して後世代にツケを残す原発を拒否し、風力やバイオガスなどの自然エネルギー、再生可能エネルギーの開発を積極的に進めている。その結果、デンマークは世界一の風力発電機輸出国となっている)

< 19日 >

出発2時間前の成田空港では、いつものように重量オーバー分費用の値引き交渉が始まる。今回は、各自の荷物以外にビタミン剤、作文集のポルトガル語版、日本語版に加え、ギターが2本とトーンボードそして、信州大助教授の職を辞してベラルーシ国立甲状腺がん治療センターで手術を続けている菅谷昭さんへの荷物、さらにモスクワでのチェルノブイリ写真展に出品される本橋成一さんの写真などが加わってオーバー分が大きかったが、この手の交渉に強い大友さんの力で大幅値引きに成功。

ノーギャラのボランティアで公演を引き受けて下さった辻さんは「ピクトルやリュウダと再会できるし、現地の音楽家にも会えるし、本当に楽しみだなあー」と重たい手荷物を機内に運びながらも顔はニコニコしている。

「福岡に事務局をおく市民団体が、チェルノブイリで、これだけの活動を続けているのに、地元の新聞社が一度も

現地取材をしていないのは情けない」と上司を説得して同行取材にこぎつけた野中さんは、モスクワに向かう機内でもチェルノブイリの勉強に余念がない。

シュレメチィボ空港に降り立った時の気温が9度で、思っていたより暖かくホッとした。しかし、予想はしていたものの通関に2時間もかかりドツと疲れが出る。この日は、モスクワ郊外のホテルに宿泊。

## < 21日 >

サナトリウム九州の副主任医師ラリサ・ヤコベンコさんにビタミン剤を贈呈した後、チェルノブイリの絵を描いた子ども達と会うため、青少年宮殿の絵画教室を訪問した。6才から18才までの少年少女20人ほどが絵を描いていた。この宮殿は1986年の春にオープンしたが「なぜ急に子ども達が疲れやすくなったのかが分からなかった」と絵の指導をするワレンチナ先生。「チェルノブイリというテーマを、子ども達は、怖くて好きではないが、その必要性を教えている。チェルノブイリの子ども達の基金や病院のために展覧会を開いている」とのこと。

## < 22日 >

9人乗りのワゴン車（できるだけチャーター料の安い車を頼んでいたため、かなりのオンボロ車）に私達4人とヤコベンコさん、通訳のリューダさん、そして運転手のイワンさんの7人が乗

り込んで、スタイキを11:30に出発。

この車は窓があまり開かないうえに、道路舗装をしてない土道になると、車のドアの隙間から土埃が入ってきて埃が車内に充満するため、皆タオルで顔の半分、鼻から下を覆面のように覆った。その様子が、まるで銀行強盗の一団のようで、みんなで笑い合った。

「苔、ああ苔！」を書いたピクトルが住むクリチェフには16:30に到着。案内された博物館では、<パンと塩>による最高の歓迎を受ける。館内では、チェルノブイリ10周年をテーマとした絵や写真（ピクトルの父、バレリー・ブイソフさんが撮影したもの）が数多く展示されていた。博物館長の説明を一通り聞いた後、辻さんのレクイエムコンサートが始まった。私が、これまで日本で聞いたもの以上に、限らない優しさを感じる11弦ギターの音色だった。涙ぐんで聞いている人が何人もいた。コンサートが終わった後に、ある男性が私達に、一遍の詩を詠んでくれた。

### 兄弟

彼らはまず海を渡った  
飛行機で地球の半分を飛んだ  
ベラルーシの人々と  
悲しみを分け合うため  
そしてこの4月のある日  
私たちのもとにやってきた。

この謙虚で、私たちに微笑む人たち

を見る

一人一人にキスしたいくらいだ。

僕は思う。「彼らは友達じゃない、  
今では実の兄弟なんだ！」

### < 23日 >

ビクトルの家から車で1時間ほど走ったところに強制移住の村、コマロピッチ村があった。1平方キロ当たり1キュリーという放射能汚染レベルは、日本では放射線管理区域に指定されるが、この村は23キュリー。バレリーさんによれば「この村には強烈なホットスポットが所々にあったことと、移住が遅れたため、移住後ほとんどの村人は甲状腺ガンや胃ガンの手術を受けたし、多くの人々が死亡した」

この日コンサートが予定されていたチェチェルスクに到着したのは16:00。出迎えの人がいないので、役場の職員に話しを聞いてビックリ。「コンサート開始時間が11:00だったが、何時間待ってもあなた達が来ないので、村人は皆帰ってしまった」という。大変なスケジュールの確認ミス。それでも、会場のメルクールピッチ村文化会館には、担当者が待っているかも知れないので「とにかく行ってみよう」ということになった。そして、二度目の驚きに、私たちは声を失った。なんと、文化会館の入り口に並ぶ人々は、5時間以上も待たせた私たちをくパンと塩とアコーデオンの音楽、そして、最高の笑顔で出迎えてくれたのだ。

17:45会場周辺の村人が集まってコンサートが始まった。このコンサートで辻さんは「ベラルーシの風景を見ていたら自然にでき上がった」という新曲を披露してくれた。大きな失敗に肩を落としていた私達は、出迎えの笑顔と辻さんのギター、そして、村人の盛大な拍手に慰められていた。

### < 24日 >

朝起きてチェチェルスクホテル周辺の放射能を測定器で測ると一般の3倍~6倍の数値を示した。役所近くの公園を測ると10倍近い数値を示した。計測している私を見て、若い女性が「数値はどうか？」と聞いてきた。通訳がいなかったので、下手な英語とできないロシア語を駆使して「安全な数値ではない、この公園には入らない方がいい」と身ぶり手振りで説明すると、不安そうな顔をして計測器の数値を何度も確かめていた。

この日のコンサート会場ナローブリャ文化会館には、若い人たちがたくさん詰めかけていた。その中に、昨年9月に一緒に原発に同行してくれたズボロフスキー市長がいた。彼は「今年、市長職を退き今は年金生活をしている」と言いながら、去年チェルノブイリ原発4号炉前で一緒に写った写真をくれた。ナローブリャ病院にビタミン剤を贈呈したいと言うと、嬉しそうな顔をして「病院から医者連れてくるから、この会場で渡してほしい」という。何故そうしたいのか、私には分かるよう

な気がした。昨年秋、私は彼に次のような質問をした「汚染レベルが18キュリーで、病院の医者さえ、放射線被曝を恐れて去っていくこの高汚染地ナローブリヤに、事故から9年半経っても、未だに多くの子ども達が住み続けていることをどう思うか」彼は、苦渋に満ちた顔でこう言った「大人たちは仕方がないが、子どもや若者はもっときれいな、汚染のない所に移住した方がいいと私も思う。しかし残念ながら、私達にはそれを実現する力がない」

汚染地の若者や子ども達には、大人や社会に対して不信感を募らせている者が多いという。そうした暗い状況だからこそ、このように若者たちがたくさん集まっている場で「遠い日本から海を越えて支援物資を届けてくれる人たちがいることを知らせたい」と考えたようだ。

## < 25日 >

作文集にある「わたしは生きる」を書いたリュウダの住むグルーシコピツチ村に着くと前方から、めずらしくバイクに乗った人がやってきた。その人がリュウダのお父さんアンドレイ・チュプチュクさんだった。

リュウダに連れられて学校に行くと講堂の中は、300~400人の子どもと40~50人の大人でびっしり。はじめに子ども達の歓迎の歌、踊り、楽器演奏が披露された。次に、私達一人一人をリュウダが紹介し、彼女自身のスピーチが始まった。「・・・私の作文が選ば

れて本に掲載され、さらに日本にまで招待されたのは、本当に幸せなことでした。しかし、私がそのような幸運に恵まれたのは、もちろん私一人の力ではありません。多くの人たちのお陰です。特に、担任の・・・」このスピーチを聞いて担任の先生は涙が止まらなくなっていた。

辻さんのコンサートのあと、リュウダ宅での歓迎昼食会には、校長と村長も出席。今夏のスタディーツアーについても話し合った。観光客など来ることのないこの農村には、宿泊施設がない。しかし、私達は「学校でも、ホームステイでも、どんな形でもいいから、この村に宿泊して、村の人たちの話をじっくり聞きたい」とお願いした。

## < 26日 >

ミンスクに戻った私達は、朝からテレビに見入っていた。今日はチェルノブイリ原発事故から丸十年で、特別番組が早朝から流れている。日本で見たことのない事故処理作業や汚染地の村が延々と映し出されている。一日中この番組が続き、私達も夜遅くに、少しだけ出演することになっている。

この日最初に訪問したのは、汚染地から移住した人たちが住むマリノフカ地区の第205学校である。チェルノブイリ事故10周年記念集會に、ゲストとして招待された。会場のホールには、300人ほどの子ども達が、席を埋め尽くしていた。子ども達に「サナトリウム九州を知ってるかい？」と聞

くと、一斉に「知ってる！」という大きな声が返ってきた。(一部の子ども達は、サナトリウム九州で療養してきたとのこと) 下手な私のスピーチにも元気な拍手をしてくれたし、ロシア語を少し話したら、とても喜んでくれた。高汚染地から移住してきた子ども達が、思っていたより元気で、明るかったことが嬉しかった。集会の終わり近くになると、会場の明かりが消されスライドが映し出された。そのスライドの写真は全て、彼らが生まれ育ったふるさとの美しい自然であった。会場には「私にふるさとを返して」の作者であるジアナ・バリコもゲストとして招待されていた。スライドの写真を真剣に見つめている子ども達の瞳の奥に「私にふるさとを返して」という願いが込められているような気がした。

夕方から、ベラルーシ音楽アカデミーコンサートホール(聖ルカ教会)での、辻幹雄ギターリサイタルが始まった。さすがに音響は抜群である、辻さんから一番遠い席にいても、ギターの音色がしっかり聞き取れる。音楽関係者がたくさん来ていることもあり、辻さんにも一段と熱がこもる。プログラム最後の演奏が終わって、「さあ、帰る準備をしよう」と思うが、拍手が鳴りやまずアンコールの連続。終了時間が大幅に遅れたため、遅い夕食をかんたんに済ませて、ベラルーシ国営テレビに向かう。テレビ局の玄関に入ると、銃を持った警備員が鋭い視線を一人一人に向ける。その警備員の前の金属探

知器通路を通過して、奥に入っていく。二階のスタジオの前に来ると見覚えのある顔のおじさんがいた。思い出した。写真で見たことのあるチェルノブイリ担当大臣ケニク氏だ。スタジオの中に入ると20人くらいで円卓の討論会が行われていた。ベラルーシ、ウクライナ、ロシア3カ国のNGO、学者、研究者が激しい討論を繰り広げている。それを見ていた私達の所に、ディレクターがやってきて、ヤコベンコさんと打ち合わせを始めた。「それじゃあ、今からテレビに映っている画面の中に入って行って下さい」と言われ、よく分からないままゾロゾロと中に入った。ヤコベンコさんが空いた席に座り、カメラに向かって持参した作文集の説明を始めた。「これがロシア語版、これが日本語版、これが英語版、これがポルトガル語版、このようにく黒い風の跡>は、諸外国からも注目されています。皆さんも是非、チェルノブイリの子ども達自身の心を読んで下さい。そちらにいらしている皆さんは、毎年日本から援助に来られている方々です。この作文集の出版にも協力していただきました。今回は、11弦ギターの第一人者である辻幹雄さんが、汚染地をレクイエムコンサートで回るために同行されています、レクイエムの曲をお聞き下さい」辻さんがレクイエムを一曲だけ演奏し、それがエンディングとなって討論会が終わった。そして、早朝から深夜まで続いた長い長いチェルノブイリ特番は幕を閉じた。

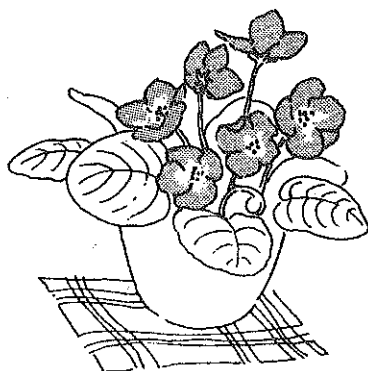


今回の訪問では、さまざまなレベルの放射能汚染地を回ってきたが、事故から十年経っても被害は軽減されず、ベラルーシ経済の悪化に伴い年々事態が深刻さを増していることを感じた。昨年秋の訪問で一番強く考えさせられたことは、汚染レベルが高く、病院の半分以上の医者が放射線被曝を恐れて去っていくような高汚染地区に、多くの子ども達に移住できずに取り残されている事実であった。今回の汚染地でのレクイエムコンサートにも、多くの青年と子ども達が集まった。

私達はこれまで、病院に医薬品や医療器具などを届けてきた。もちろん、この事は、これからも続けていく必要があるが、「より有効な支援」ということを考えた場合、多くの子ども達を、重い病気にしてしまう確率の高い高汚染地からの移住をどうすすめるのか、そのために私達に何ができるのかとい

うことを考える時期に来ていると思う。

もう一つ重要なことは、ベラルーシ経済全体の悪化に伴い放射能汚染の強い食糧が、広範に出回っているということだ。4月23日に訪れた強制移住の村の広大な農地は、6年ほど前に放棄されたはずだが、全く荒れておらず、小麦やじゃがいもを栽培している形跡があった。本来なら、法律違反で罰せられるところだが、そうはならない。国全体が、汚染された食べ物も食べなければ飢えを凌げないからだ。放射能が濃縮された牛乳も、森のキノコやイチゴも、食べざるを得ないのが現実だ。チェチェルスクの調査では、市場に出回る牛乳の四割が汚染されていたという。放射能の影響を最も受ける幼い子どもたちだけでも、安全な食べ物を食べられるようにすることができないのか。私達に何かできることはないのだろうか。



# ベラルーシの生への闘い

菊川 憲司

第5次調査団に最初から最後まで、私たちの面倒をみてくださった一人にボイコさんという方がいました。彼はチェルノブイリ同盟の役員です。彼が私に道すがらいろいろと話してくださったことをまとめて書いてみました。彼の話はベラルーシの現代の歴史であり、世の悪と不正にたいする告発であり、そして人々の生への闘いのように見えました。

私はボイコといいます。56歳です。チェルノブイリ原発建設に14年間たずさわり、原子炉の爆発の日に被曝しました。私の歩んだ道について少しだけ話してみたいと思います。

私はウクライナのベラルーシとの国境に近い小さな村で生まれました。私は4歳のときの出来事を鮮明に記憶しています。村にドイツのファシズムの軍隊が侵攻してきたのです。彼らは村人を一カ所に集めました。まだ幼かった私は興味津々で兵隊の動きを見守っていました。その指揮をとっていたのが、黒い制服に黒い半長靴をはいた将校でした。ナチス親衛隊の部隊だったわけです。

村人は整列させられ、私と母はその後ろにいました。私は兵隊を近くで見ようと、大人の足の間をすり抜けようとしました。しかし、大人の大きい手が私を後ろに跳ね飛ばしてしまいました。その後、恐ろしいことが起こりました。一斉射撃が並んだ村人に襲いかかったのです。母は私をかばい私にお

おいかぶさりました。銃弾に倒れた村人がそのうえに幾人も倒れかかってきました。母はそのとき負傷しました。

私が今生きているのは村人のお陰です。彼らに深く感謝しています。私の村はファシストによって破壊されてしまいました。このような村はベラルーシには数十もあります。その戦争で犠牲になった人はベラルーシの当時の人工の4人に一人と言われています。破壊された村の一つが記念公園になったハティン村です。

私の上の兄は戦死しました。2番目の兄は、パルチザンに加わり、ベラルーシ解放後はソ連赤軍に入り、ベルリンにまでいきました。私は、毎年数回は、私の命の恩人である村人の墓に花を手向けるために村の墓地に行きます。

しかし、その村はチェルノブイリの30キロゾーンの内側にあり、人々は避難してしまいました。今は誰も住んでいません。

若いころは共産主義建設のためにコムソモール（共産主義青年同盟）に入

り活発に活動しました。しかし、そのころから共産党員の言動に批判的になっていきました。言うこととすることが全く違うからです。それで共産党には入党しませんでした。

建築技師だった私は、ある町の主任技師として住宅建設にたずさわることになりました。その仕事はとてもやりがいのあるものでした。あるとき私は地区の共産党事務所によばれました。共産党に入れというものでした。彼らに批判的だった私はすぐさま拒否しました。そのあとはそこでの仕事につけなくなってしまったのです。

そこで私は故郷の近くで始まっていたチェルノブイリ原発の建設に参加することにしたのです。原発建設現場の南800メートルのところにある家をあてがわれました。その家は原発建設の初期に作業員用の宿舎として建てられたものでした。その後、プリピャチに原発関係者のアパート群が建てられましたが、私はそこに引っ越しませんでした。私が住んでいた所を気に入っていたからです。松林の中にある田舎風の家が好きだったからです。

このようにして、14年の間、原発建設にたずさわったのです。1号炉から6号炉までその建設に参加しました。原発建設の上司とぶつかったことが幾度とありました。あまりにもずさんな工事に意見を言ったのです。しかし、それは受け入れてもらえませんでした。

チェルノブイリ原発事故のとき、私はチェルノブイリ原発から数キロ離れ

たプリピャチ川の下流で夜釣りを楽しんでいました。未明、何か鈍い音が原発の方からしました。別に気もとめずにいきました。すぐに消防車が数台、原発の方向に走り去っていきました。そのあと、私は川向こうの友人の所に行き、そこで原発での爆発を知りました。

私は急いで家へ戻りました。そのとき、強い放射能が降り注いでいたとは全く知りませんでした。この後遺症が今でも私を苦しめているのです。放射能によるやけどを知っていますか。このすねのやけどのあとを見てください。靴下のすぐ上の部分です。3ヶ月も治りませんでした。家の周りの草原を歩き回って放射能のちりを浴びたのです。多分プルトニウムのせいでしょう。

その被曝のせいで体が動かなくなり、家族全員キエフに送られました。重体の状態で数カ月を過ごしたわけです。

少し動けるようになったころでした。ゾーンの子どもたちが被曝線量検査のために私のいる病院に送られてきました。その様子をなんとなく後ろからながめていました。検査していたのは知り合いの村の医者でした。線量を測ったあと、その医者は計器に表示された数値の10分の1を記録として記載したのです。私は怒り、彼に正しく記載するように要求しました。その医者は私の要求をむげに拒否したのです。

翌朝、私は入院加療不要をいわたされ、病院から追い出されてしまいました。私はまだ自由に動くこともできず、途方にくれてしまいました。妻も

子どももまだ病院にいました。しかし、親切な人はどこでもいるものです。別の親切な医師が私をひきとり治療してくれることになりました。

今は、ベラルーシのピテブスク州のオルシャという町に住んでいます。妻も子どもも元気になりました。しかし、今は1級障害者で、年金で生活しています。度々頭や関節が猛烈に痛むことがあります。そのときには自分で腕に注射をします。痛くなってしまっただけでは注射も自分ではできませんから、その予兆を早めに感じなくてはなりません。

私が今やっていることをお話しましょう。私にはドイツに友人がいます。彼らにたのんでゾーンの子どもたちを療養に受け入れてもらっています。子どもたちの選考は厳しくしています。まずゾーンからの移住者の母子家庭、大家族の子どもたちで、療養が必要な病弱なものです。元気のある子どもや地縁者、血縁者は送りません。私の子どもも連れていったことはありません。

私はヤコベンコさんたちがやっ

てるチェルノブイリ同盟の設立からの会員です。日本の皆さんとはお会いする機会がなく、今回初めてお会いできました。皆さんのやっというサナトリウム・九州への支援の活動は立派だと思います。皆さんに感謝すると同時に、皆さんを尊敬します。今後は、私は国内の療養の面でも活動しようと思っています。ヤコベンコさんたちと相談して「チェルノブイリ子供基金」を今年創設しました。国内での子どもたちの療養のために資金を私の知り合いの多いドイツで集めるためのものです。

私の趣味は詩をつくることです。チェルノブイリをテーマにした詩をたくさんつくりました。もうノート数冊分もたまりました。愉快的な詩を書くのも好きです。妻といっしょに森を散歩しながら詩を書くのが楽しみです。私の今までの生きてきたことを文章にし、もちろんそれに詩を加え、本にして出版することが夢です。今、少しずつ書いているところです。

## チェルノブイリ10周年各地の取り組み

チェルノブイリ10周年に各地で様々な取り組みが行われました。そのうちチェルノブイリ支援運動・九州が関わったものを紹介します。

**北九州市** 4月26日

・チェルノブイリ原発事故10周年  
記念講演とミニコンサート～ちかこ

おばさんの見たチェルノブイリ～

**佐賀市** 4月26日～27日

・チェルノブイリ支援運動・九州  
代表 深江 守 報告会、写真展

**水俣市** 4月26日

・深江 守 報告会

**申閏市** 4月26日  
・宝蔵さんの行ったチェルノブイリ

**八代市** 4月28日  
・深江 守 報告会

**福岡市** 4月21日  
・船瀬 俊介バトルトーク、深江 守  
「チェルノブイリの子どもたちは今」

**唐津市** 5月11～12日  
・深江 守 報告会、パネル展

**下関市**  
・パネル、絵画展

**ブラジル** 4月26日  
・「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」出版記念会。

ブラジルのチェルノブイリ支援コーヒーの関係者が中心になってポルトガル語版を出版。記念会には、広島県人会、長崎県人会、グリーンピース（国際環境保護団体）、一般の人々から約80人が集まりました。

**東京** 4月28日  
・もんじゅを二度と動かさないで  
4.28大行動 in 日比谷

### 東京から報告

支援運動のメンバーの澤田美紀さん（16歳）がリュウダの作文（「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」より「わたしは生きる」）を紹介、朗読しました。

日比谷公会堂でのこの集会は、ストップ・ザもんじゅ東京など、脱原発を

目指す在京の市民団体が、チェルノブイリ10周年行事として、もんじゅの廃炉と原子力政策の根本的な見直しを求めて開いたものです。

集会は、最近新たに見つかったビデオ映像を上映し、写真家の広河隆一さんの最新の現地報告や、作家の広瀬隆さんの淡々としたもんじゅの事故の話など、中身の濃いものでした。

ビデオ上映のすぐ後で、スクリーンにリュウダの写真が大写されると、美紀さんがリュウダと友達になったことを語りかけ、作文を全部暗記しての朗読は素晴らしい出来でした。

もんじゅの地元福井からの報告や、三重県南島町の運動の話で盛り上がった後は、パレード出発です。コースは日比谷公園を出て、内幸町の東電前でシュビレヒコール、銀座（数寄屋橋）から東京駅（八重洲口）前を過ぎて常盤橋公園までの約1時間の行程です。

支援運動のメンバーは、素晴らしい横断幕で、参加者の中でも特に目立ったグループです。最初は列の中ほどにいたのが、回りの参加者から請われてパレードの先頭に進みました。途中、右翼の街宣車の妨害もあって騒然としたこともありましたが、久しぶりのストレス解消となった1日でした。

（河上）



## チェルノブイリ風下汚染地のいのちとくらしと魂とのであいを求める '96スタディツアー 準備が進んでいます

通信の前号でスタディツアー参加者の募集をしてから、次々と問い合わせの電話をいただきました。日頃から支援をしていただいている皆さんの関心の高さが感じられ、嬉しいかぎりでした。期間が夏休み中ということで、学生、教員の応募が目立ちました。応募された方には、すでにツアーに向けての学習会に参加していただいています。

### スタディツアーメンバー発表

#### スタッフ

大友 慶次、矢野 宏和、  
沢村 和世、河上 雅夫、  
山口 英之（通訳）

#### 参加者

西野 自由理（山口県・16歳）  
山口 英明（山口県・61歳）  
寺島 悠（福岡県・18歳）  
沢村 裕（山口県・62歳）  
河津 輝子（福岡県・32歳）  
佐藤 進一（福岡県・18歳）  
坂井英生（福岡県）  
安田 麗（福岡県）  
山根 真紀（東京都・16歳）  
山下 美保（千葉県・22歳）  
大場 満（神奈川県・52歳）  
門間 直輝（東京都・18歳）  
小峯 光男（東京都・53歳）  
塩田 勝江（東京都・43歳）

小山田 佳子（神奈川県・21歳）  
柳田 鮎美（東京都）  
三輪 節生（福岡県）

☆スタディツアーの参加者には、「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」を読んだ感想と、ツアーへの参加理由を提出してもらっています。その中から寺島 悠さんのものを紹介します。寺島さんは、西日本新聞にも登場しました。

### 「わたしたちの涙で雪だるま が溶けた」を読んで

寺島 悠（大学1年）

わたしはまず、子どもたちが9年前に体験した原発事故の重大さを衝撃と共に肌で感じた。わたしがこの本（この作文と）出会うまで、ほかの多数の人と同じように、“チェルノブイリ”は“どこか遠い国の事故”でしかなかった。原子力発電所の問題には以前から少し関心はあったが、かと言って、自分で詳しく調べてみるというところまでも行っていなかった。ただ漠然と、一度じっくり知ってみないといけない、とだけ思っていた。しかし今は違う。これははっきりと断言できる。作文を読み、ベラルーシの子供たちと出会い、いろいろな人と関わったことで、

チェルノブイリは他人事ではなくなつた。私は“慈善”という言葉は好きではない。“国際貢献”と同じように、何かしら、不透明なものを感じるからだ。だから、“ボランティア”という言葉にも、どこか疑いを捨てきれなかった。これは偏見でもあったのだが、そういうわけで、新聞で編集ボランティアを募集していた記事を見たとき、申し込むかどうか迷った。今考えると恥ずかしい限りだが、“深入りしたくない”という気持ちもあったのだ。世間の人々が、かつての私のような偏見を持っていたら、すべての自発的なボランティア活動は、ゆがんだものにされてしまう。だから、迷った末にかけた一本のあの電話は、私の人生を良い（と、自分に素直にそう思える）方へと導いてくれた気がする。私に何ができるのか、いや何かできることがあるのかどうかさえも分からないけど、“理解する”というただそのことだけは、確実に、多くの問題を良い方向へと導いてくれる方法の一つだ、と言えると思う。だから私は、自分自身を納得させるためにツアーに参加したい。チェルノブイリにすでに私は片足をつっこんでいる。何が真実なのか。何が起き、誰がどう影響を受けているのか。私は自分のこの目で、この体でじかに感じ取りたいのだ。そういう自分を納得させるため、それと夏に会った子供たちと再開するために参加を希望する。ナチスについても興味があるので、現地の人々の話を直接聞けるこのチャンス

を逃したくない。チェルノブイリに行くことによって、たぶんわたしなりに越えなければならないハードルも生まれるだろうが、それでも私は、自分自身の“知りたい”という気持ちに素直でいたいと思う。ロシア旅行にいつか行って見たかったので、非常に良い機会を得ることができそうだ。これからお金も貯めなければならないが、嫌だなという気は全然なく、むしろわくわくしている。あと五ヶ月も待つのが長く感じられる。チェルノブイリは終わらないのだ。本や新聞では感じ取ることの難しいことまで、体験できたら幸いだと思う。スタディツアーではあるが、あまり肩に力を入れすぎず、ありのままの自分でいろんなことを吸収したい。

はりきってます！

スタディツアー学習会より

北九州会場

4月28日に記者会見とベラルーシの歴史の学習会。5月19日から通訳の山口英之さんによるロシア語講座が始まりました。若い頭脳と、ロシア語を勉強した経験を持つおじさんたちに混じって、事務局スタッフもこの際と、かたまりかけた頭をかかえて四苦八苦しています。学習会は月一回を目途として、八幡東中央公民館で開かれます。ツアー参加者でなくても、学習会には参加できます。その場合は、資料代5

00円が必要です。ロシア語の勉強の間に、サナトリウムの子供たちとの交流会に向けての出し物も練習する予定です。

### 東京会場

4月27日、東京の市民運動のたまり場となっている「たんぼぼ舎」で第1回の事前学習会を開催しました。

東京周辺のステタディツアー参加者

の5人と、これまで東京での活動を続けてきた高校生など数名で、簡単なロシア語の学習をしました。

東京からのスタディツアー参加者は高校生から50代まで幅広く、参加の動機も色々です。一方的に日時を決めて連絡したにもかかわらず、全員参加となりました。

## 書籍の案内

「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の各国語版がつぎつぎに出版。

- ・英語版 1500円 43編 158頁

\*まだ20冊ほどしか届いていません。注文が多い場合は秋以降のお届けとなります。

- ・ポルトガル語 1500円 25編 144頁

\*限定50冊

- ・ロシア語 3000円 100編 330頁

\*ロシア語を勉強してぜひ原語に挑戦を!

- ・ドイツ語が間もなく出版されます。また、フランス語はユニセフが出版する予定となっています。

- ・社会エコロジー同盟の議長、ワシーリ・ヤコベンコさんがチェルノブイリ事故10周年報告を出版しました。800円 91頁 ロシア語・英語・ドイツ語の対訳

- ・[チェルノブイリ・レポート] 汚染地帯に行く ～子供たちを放射能が直撃した!～

\*北海道チェルノブイリ調査団編87頁 500円 ヤコベンコさんも登場しています。

- ・チェルノブイリ10年 大惨事がもたらしたもの

原子力資料情報室編104頁 1030円

注文は、いずれも支援運動・九州事務局へ





## 窓口より 東京

☆ 今まで東京窓口として活躍してくださっていた河上さんが、金沢転勤となり、新しく大淵さんが東京窓口を引き受けてくださることになりました。大淵さんからの自己紹介です。

この度、河上さんの後任として東京事務局をやらせていただくことになりました。大淵です。

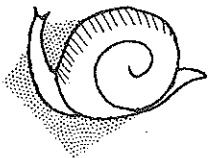
河上さんとは十数年来の友達です。河上さんの熱意とひたむきさに他の友達共々ここまで引っぱられてきたという感じです。

93年にベラルーシの子供たちを成田まで送迎し、遊園地に行き、コスモエネージャーをしました。

去年の作文集の子供たちの交流会での受け入れには、たくさんの高校生がボランティアとして参加をし、たくさんの人達にこの運動のことを知ってもらうひとができ、これはひとえに河上さんの地道な努力の成果だなと私たちは実感し、讚美しています。そんな河上さんの後任というのは、とてもおこがましいのですが、夫婦二人で頑張りたいと思います。

大淵 両平・清子

TEL 03/3249/0767 (職)



## 事務局より

### 郵便振替用紙について

振替用紙は毎号入れています。いつでも思い立った時に募金したいという要望があったためです。また、事務作業の手間を省くためでもあります(今回は通信を3000部以上発送しますので、ひとりひとり選り分けるのは大変な作業となります)。すでに募金をされた方には、混乱を招いて申し訳ありませんでした。どうぞご了承ください。入金をしたかどうかにつきましては、事務局までお気軽にお問い合わせください。(7月までは、事務局は13時から開きます。それまでは留守電に入れて置いてください。こちらから電話します。)

不要な振替用紙につきましては、他の人に募金を勧めるなり、廃棄するなりしてください。また、書籍の注文もこの用紙でできますので、ご活用ください。

### 事務員の募集

チェルノブイリ支援運動・九州では、事務員を募集します。

人数	1名
時給	600円
交通費	支給に上限有り
時間	午前10時～午後2時

週に4, 5日15時間

程度

仕事内容 募金の整理、電話の対応、その他

条件 ワープロができる人。パソコンや印刷機にアレルギーの無い人。

月一回の事務局会議に出れる人。

\*委細面談の上、決定させていただきます。7月頃より仕事をお願いしますが、応募は早めをお願いします。

事務所はエアコンもなく西日はガンガンあたりますが、がんばってくれる人募集!!事務局スタッフは皆、やさしくて親切だと評判です???

### ロシア語を学びませんか?

支援運動・九州会員でスタディツアーの通訳として同行して下さる山口英之さんが希望者にロシア語を教えてください。9月ごろから月2回、土曜または日曜日に北九州に来れる方でロシア語を学びたい方、連絡してください。5人以上集まれば講座ができます。



### 南風録

ベラルーシ共和国(旧白ロシア)の首都ミンスクに「キェウシユウ」という施設がある。鹿屋市生まれで、北九州市に住む深江守さん(三九)

が代表の「チェルノブイリ支援運動・九州」で運営費の大半を負担する。その縁で名づけられた▼同国は十年前のきょう、隣国ウクライナのチェルノブイリ原発が爆発したとき風下にあった。長崎の二百倍ともいう放射能の、七割が落ちた。汚染地区に住む子どもは五十万人、うち二万五千人が甲状せんに異常を抱えるという▼深江さんらは昨年、ベラルーシの子どもの作文集を自費出版した。「私のがんは末期である。死とはいいことだ、というのを証明する何か美しい哲学を考えつくことはできない」

「ほくたちは、チェルノブイリによって刻印を押された無実の囚人だ。―致死量の放射能がある土の上で遊ぶ」(「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」・梓書院刊)▼絶望するには痛々しい年齢。だが「静かな核戦争」の被害はこれからだ、と子どもも知っている。「キェウシユウ」はそんな子を汚染地区からひととき離し、検査するサナトリウムとして四年前に発足した▼深江さんはいう。「経済の混乱でガーゼさえ不足しています。被災者団体を母体に、ドイツなどから医薬品を輸入する商社を設立したい。九州はその資金を提供する。具体化したら全国に呼び掛けます」▼郵便局に勤めながら奔走する深江さんを支えるのは「ベラルーシの人々との出会い」。作文集に登場した子ども四人の来日を機に、「この夏初めて九州を中心とする中・高・大学生二十人がベラルーシに出かけ、出会いを引き継ぐ。問い合わせは0993(681)1780。

南日本新聞

# 核汚染実態一の目ぞ...

新風通いカ月3,850円・1部(朝刊)110円(夕)

新

本

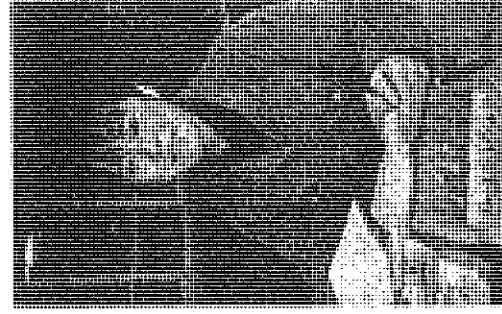
西

日

金曜日

## チェルノブイリ いまなお苦しむ人たち

96.4.26



今夏、チェルノブイリ原発事故の被災地ベラルーシを訪れる寺織綾さん

旧ソ連のチェルノブイリ原発事故は十六日、発生から十年を過ぎる。惨害にさらされたベラルーシ共和国などの住民は今も放射能被害に苦しんでいる。被災者の救済活動を続けている市民団体「チェルノブイリ支援運動・九州(事務局・北九州市)」は「悲劇を繰り返さないために、現地の惨状を若者たちの胸に刻んでもらいたい」と今夏、九州・山口の中学生から大学生まで約十人を含む「視察団」を現地に送り込む。

### 市民団体九州の若者ら派遣

支援運動・九州は昨年五月、原発事故を被災した子供たちの作文集「わたしたちの涙で書きたるまが澄けたまほ時」八月には作文を書いた年少少女四人を日本に招き、北九州市で交流会を開いた。

彼らと同年代、作文集の編集作業を手伝った高校生などから「今度は私たちが現地に行きたい」との声が出たため、視察を計画したところ福岡、長崎、東京などから希望を中心に十五人の応募があった。

視察団は八月中旬に出発、十日間の日程でベラルーシの核汚染地域やウクライナのチェルノブイリ原発などを見学。支援運動・九州が現地の民間団体と共同で派遣している視察団を支援するも、放射能被害の不安

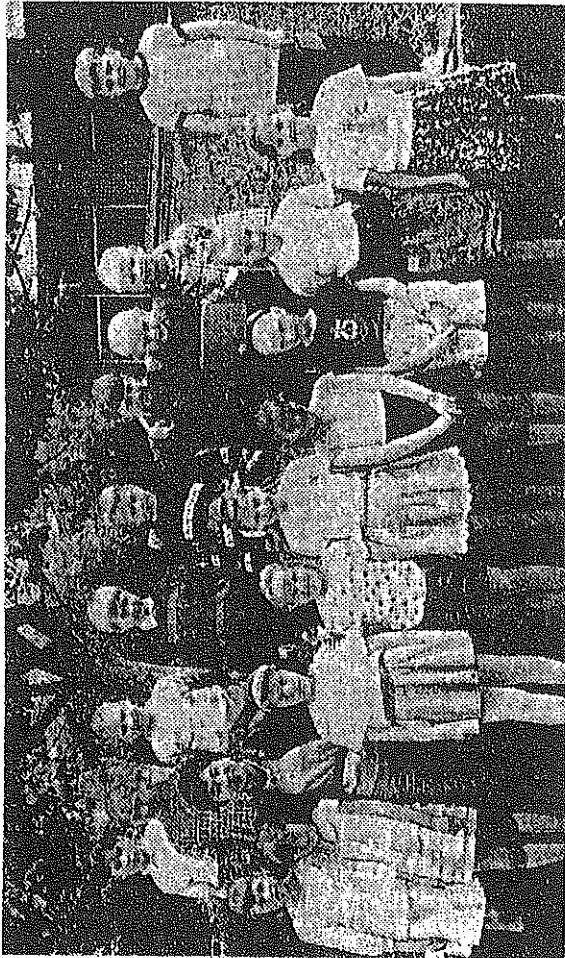
に悩まされる子供たちと交流する。

「いまなお、苦しむがいることを忘れたくない」と参加者の一人、西野学院大二年生寺織綾さん(21)福岡県豊津町。現地とは、昨年の交流会を知り合い、又遭っている女のほど重宝する予定で、「自分の目で事故の事実をしっかり見つけたい」。

山口県下関市の高校生生、西野自由理(しゅり)さん(16)は事故直時のことはほとんど知らない。放射能被害によって事故現場が生まれ、森の緑も失われたことま父親から聞き、関心を持った。「一度はくしな子供たちに事故をどう考えているか尋ねたい。その事実を聞き取り、身近な友達にも伝えたい」と話している。

### 現地の子供と交流も

※九州の運動が「何と北海道で」紹介されました。



「サナトリウム・九州」で養育する子供たち（上）の4年ぶり、「チエルンケイ」支援活動「九州」支援

96.4.30

# 九州のNGO、運営3年

チエルンケイ医療事故後、日本では非政府組織（NGO）による子ども支援活動が生まれた。その中で「チエルンケイ」支援活動「九州」（深江寺代表、事務局長・北九州市）は、被災した子供たちの転地養護施設「サナトリウム・九州」を1992年12月ベラルーシに初めて開設。3年間で2000人余の子供たちを育び入れた。専断な支援活動のスタイルとして、連年の運動誌を通じて関心を寄せている。

## サナトリウムで子供の心をケア

サナトリウムが、運動誌のスタッフの三浦義雄理事長（サナトリウム）施設の一部を改造した。現地の市民団体「社会三ロシ」同型チエルンケイ」を共同で運営する。

施設は専用車道で囲まれた静かな環境にある。養護は一回24時間。7〜18歳が対象で定員は200人。専断4人を各のスタッフは10人で、サナトリウム、体育館、ダンスロ、映画ホール、医療室がある。リラックにも精神面のケアが充実。サナトリウムが現地に設置されるきっかけになった。

目の届きは資金難め。ベラルーシでは物価が暴騰し、子供一人当たりの養護費がオープン時の50%から194%に跳ね上がった。現地の労組が財政上の理由で、95年から支援を中止したため、九州の拠出金が増え、04年には方だったのが、今年も80%方に膨らみすぎた。

「チエルンケイ」支援活動「九州」は90年8月に発足。九州、東京などに33の支援グループがあり、会員は約2000人。札幌で28日に開催した「北海道・チエルンケイ」支援まつり」の招き太郎さん（68）は、区役所、区民会館、生涯学習センター、後援会、市民会館には「自分たちの目に映る運動をしてみたい」と、九州の養護をしよう。私たちも大いに学びたいと話す。

「チエルンケイ」支援活動「九州」の窓口は、電話093・881・1780（く）。

（読者誌・山田義彦）

